（防災）竜谷小学校

かかわることで新たな課題を見つけ、
かかわることで学びを深める総合的な学習の時間を目指して

～　未来の竜谷をつくるのは私たち　～　　６月～３月（２３時間）

１　ねらい

竜谷学区のすてきなところを、生き生きと発表する子供たち。緑豊かな環境も、安全な生活を送れているのも、大人たちの手が入っていることに気づく。すてきなところの裏には、人がかかわっていることに気づいた子供たちは、私たちにできることは何か考えるようになるのではないか。そこで、子供たちが発表したことを５つ（交通安全、防犯、防災、福祉、自然）に分類し、学区の人の声や考え方に耳を傾けたり、学区の防犯・防災マップをもとに見直したりする中で、多面的に考え自分の考えを構築させていきたい。

一方で、調査、体験したことをまとめていることが、よりよい竜谷学区につながっていくか問いかけ、私たちにできることを意識させる。その際に、例えば、学区の人の声「竜谷学区を東西に横断する幹線道路の制限速度を時速４０kmから５０kmにしたい」を取り上げて話し合ったりするなど、調査が停滞したり、視点が偏ったりしたときに、随時子供たちがかかわれるような場を設定していく。

調べたことを発信するには、正しい情報であること、誤解のない伝え方（表現）であるかを確認する必要がある。情報を発信するということに責任があることを確認させたい。「効果的な伝え方・正しく情報を伝えるために気をつけること」をテーマに、テレビやラジオの報道の仕組みを、直接テレビ局の人をGTとして招き、直接学ぶ機会をつくりたい。

この単元の終わりには、自分たちがまとめたことをもとに、それまでの調査で考えたことや、こんな竜谷を守っていきたい、新しい竜谷をつくっていきたいといった思い、「竜谷の未来」を話し合っていきたいと思う。

２　実践の概要

３　単元構想

[児童の意識の流れ]

○単元前「竜谷　知ってるつもり？」
- 竜谷の自慢はなんだろう。
- 竜谷の自然は誰が守ってるの。

◎問題をつかむ子
- 竜谷の自然は宝物だよ。
- 交通当番や学校の草取りを、お母さんがやってるよ。
- クラブを教えに来てくれてるよ。
- お父さんもおじいちゃんも竜谷出身で、いい学区だって言ってたよ。
- どうして学校のため、私たちのために、活動してくれるのかな。
- もっと学区のことを知らないといけないな。

◎見通しを考える子
- 学区が広いから登下校のとき、一緒についてきてくれると思う。
- 学区の人が笑顔であいさつをしてくれるから、元気になるよ。
- 支え、支えられている。学区の人のためになることを考えたい。
- 僕はしてもらうことばかりだな。
- 学区の人に質問してみたいな。
- もっとすてきな学区にするには、どうしたらいいのかな。

◎見通したことを試す子
- 私たちがしてもらってきたことを分類してみよう。
- 学区の人の意見に考えをもつために、調べないといけないな。
- 交通安全、防犯、防災の面で、どんな対策がこれまであったのかな。
- 交通事故がなくなるように、犯罪が起きないように、災害にあったとき何か自主的に動けるように、できることはないのかな。
- 僕たちは調べるだけでいいのかな。

◎学習したことを見直す子
- 地域の人の意見を聞いてみたいな。
- もっと分かりやすく、見やすくするための工夫はないかな。
- いざというときに役立つように、今後どうしていったらいいのかな。

◎学習したことを生活に結びつける子

[学習内容・学習課題]

・安心、安全な学区だな。
・自然がいっぱいで美しいな。

学区の人が、私たちのためにやってくれていることはなんだろう。

どうして学区の人たちはボランティアをしてくれるのかな。

・竜谷学区はすてきだな　・学区の人たちが支えてくれるのかな。

第１時　よりよい竜谷学区するためにできることを考えよう。

①交通安全　②防犯　③防災　④福祉　⑤環境

第２、３時　学区のために、今の私たちができることはなんだろう

学区の人がボランティア活動してくれてるから聞いてみよう。

防犯・防災マップやこども 110 番の家があるね。守られているね。

第4時（本時）　安心・安全な学区をつくるために、私たちにできることを考えよう。

学区の人の声・考えを直接聞いてみたいな

第５時　学区の人の声・考えについて自分の意見をもとう

交通安全　防犯　防災

第６・７時　どんな視点で調査をしたらいいのだろうか

第８～１５時　【調査・まとめ】

・横断歩道・ガードレール・信号・標識・交番・交通量・地域の安全対策・地域特有の危険。

・看板・カメラ・街灯・電話ボックス・子ども 110 番・交番・公園・暗い道・地域の防犯対策。

・消火器・消火栓・防火水槽・避難場所・防災備蓄倉庫・消防署・自動販売機・地域の安全対策

これで私たちが調べたこと、伝わるのかな

第１６・１７時　伝えるプロに聞いてみよう！
「効果的な伝え方・正しく情報を伝えるために気をつけること」

第１８・１９時
アドバイスをもとに、マップを修正し、よりよいものにしよう。

マップを発信して、僕たちの考えを知ってもらいたいな

第２０・２１時
「安全・防犯・防災マップ」を地域の人に発信しよう

発信したマップは役立つのかな

第２２・２３時
学区の人と「これからの竜谷」について話し合おう

・「安全・防犯・防災マップ」にまとめてみると、私たちの生活は、たくさんの人に支えられていることが分かったよ。
・私たちにできることもあるよ　・僕たちも果たす役割があるよ。

効果的な見通し・見直し・かかわり合いのための教師の主な支援・評価

◎明治３６年に開校したが、昭和５１年に山の斜面を切り開いて造成したので樹木が１本もない状態から今に至っていることなど、調べる必要性を実感するような話し合いの場を設定する。

・学区の人に尋ねたり、調べに出かけようとしたりする意欲を高めることができたか。（ワークシートより）

◎桑谷と竜泉寺の防災マップや、中学生が作ったマップを提示し、実際に訪れ調べてみるように、助言する。

◎学区の人や家族に聞いたことをメモするワークシートを用意し、提示できるようにする。

・友達が聞いてきたことと自分の調べたことや考えを比較するなど、多面的に考え自分の考えをもつことができたか。活動や発表の様子・ワークシートより

◎マップ作りがよりよい竜谷学区につながっていくか問いかけ、私たちにできることを意識させる。

◎調べていく過程で、ＧＴの招聘や体験学習を取り入れる。
【交通安全・防犯】駐在所、消防署の方
【防災】出張授業「ＡＥＤ・心肺蘇生法」
「健康生活支援講習」（日本赤十字社）

◎学区の人の声、考えをもとに、私たちにできることを見直す姿勢の児童を称賛する。

◎調べたことを効果的に、正しく伝えるために、報道の仕組みをＣＢＣの解説員やアナウンサーから直接学び、作成したマップを見直すきっかけの場を設ける。また、マップの効果的な発信方法を尋ねるなど、プロの考えを知り、自分たちの活動に取り入れるよう、助言する。

◎作成したマップを学区の人に説明し、そのマップをもとに、未来の竜谷に向けて自分たちのできることを行動宣言にまとめる。

自分たちの住む竜谷学区について関心をもち、進んで調べ、自分にできることを考えようとする子

自ら調べたことをもとに、友達と話し合い、思考活動を通して得た知識を、身の回りの人に発信することができる子

学区を支えている人の工夫や努力を考えるとともに、ふるさと「竜谷」に対する愛情をもち、地域の活動に積極的に取り組む子

【教師の支援と具体的な手立て】①新たな課題を見つける「かかわり」

日本赤十字社の手島先生と太田先生が、地震の仕組みや南海トラフ巨大地震、避難所の暮らしについて、分かりやすく説明してくださいました。

岡崎の奉仕団の方が３人みえて、丁寧に教えていただきました。　男女のペアで互いに仲良くハンドケアをし合いました。

A）日本赤十字社　『学校が避難所になったら、ぼくたちにできることは…』

学区の危険な場所を調べたり、いざという時の備えの防災倉庫を調べたりしてきた。調べる中で、学校が防災倉庫を管理し、避難所になっていることを知った。私たちは役に立つのか、何ができるのか？といった疑問をもった子供たち。そこで、日本赤十字社の方を招き、今まで調べてきたこと、今後の課題を明確にするため、専門家とのかかわりの場を設けた。太田アドバイザーは、14年前の東海豪雨で当時勤務されていた学校が避難所になったとき、その避難所の運営にかかわってみえたので、子供たちは直接、具体的な話を聞くことができ、新たな課題を見出すことができた。学校が避難所になったときに困るトイレや飲料水、ペットの問題のほか、近いうちに来ることが予想される南海トラフ大地震とはどんな地震なのか、もし起きたとき、何ができるのか助言していただいた。その後、岡崎の赤十字奉仕団の方に、地域の方とのコミュニケーションや癒しの手段として、小学生にもできる「ハンドケア」の技術を教えていただいた。気持ちがよくなり、みんなが仲良くなれるので、家族や親せき、近所の方にもしてあげたいなという感想をもった。

B）CBC　『災害時のラジオの役割』

５年生は、社会科「情報と私たちの生活」、国語科「テレビとの付き合い方」など、メディアについて考える機会が多い。専門家（赤十字の方）から、避難所での現実を知らされ、私たちにできることは本当にあるのかという疑問の答えの１つとして、避難所においては小中学生が活動源であることを理解した。大人たちは避難所の外で、がれきの撤去などに出かけてしまう。避難所には、お年寄りなどの弱者。お年寄りとのふれあいや、けがをした人や障害をもった人への支援…、やるべきことはたくさんある。そんな思いでいたときに、情報を正しく、速く伝える役割を担うメディアの仕事に携わる方を招いて、メディアの果たす役割について考えた。

- 避難所にいると、不安な気持ちになる。だから、今どんなことが起きているか、正しい情報を得ることが大事。
- 事実がわかれば、何が必要か、何をすることが今大切なのか分かるのではないか。

9月22日、岡崎市立竜谷小学校にCBCテレビの後藤克幸解説委員と尺朋宏アナウンサーがおじゃまし、5年生32人を前に出張授業を行いました。
授業ではテレビ・ラジオその他色々とある「マスコミ」について生徒たちが自分の視点で分類分けしたり、地震や台風など大きな災害が起こった際にテレビが果たす役割を話し合ったりしました。最後には質疑応答の時間が設けられ、アナウンサーになったきっかけや、記者になって大変だった事など、子供達から積極的な質問が寄せられました。

②学びを深める「かかわり」　　***C）福祉実践教室　『動いてみよう、感じてみよう』***

専門家から、様々なことを学んだ子供たちは、実際に動き出そうと思ったが、何をどう動いたらよいか困惑していた。そこで、話し合いの場を設け、どうして動き出せないのか話し合った。避難所生活をしたことがないからお年寄りが何に困るか分からない、障害をもった人と接したことがないから気持ちが分からない…など、接する人の内面（気持ち）が見えないことが、１つの原因だととらえているようだ。そこで、車いすで生活をする方をお招きし、率直に尋ねたり、体験してみたりすることで、感じる場を設けることにした。（車いす体験と、高齢者疑似体験を行った。）「大変だ」「不便だ」というイメージだけでとらえていた子供たちは、実際に体験することで、段差がない階段にすればいい、いっしょにそばについていてあげたり、ゆっくり待ってあげればいいのでは？、そっと手伝ってあげれば大丈夫だと思う…など、自分にできる具体的なことをもつことができたようだ。

③学びのまとめ「パンフレット作り」

これまで調べたこと、体験したこと、尋ねたこと…をパンフレットにまとめる活動を行った。東南海地震が起きると言われて久しい。パンフレットにまとめながら、親子で話し合ったり、地域の活動に参加することで、いざというときの力になることに気づいたりすることができた。　専門家とかかわることで、避難所について現実を知り、自分たちにできることは何か考えることで、学びを深めようとする子供たちの姿が見られた。

- もしものために準備していることは？
- 避難所でできるハンドケア、他には？
- 防災グッズベスト１０　　など

３　実践を振り返って【○成果】【▲課題】

○教師が、子供たちに新たな課題を見出させたり、学びの停滞を感じたりしたとき、子供たち同士のかかわり（話し合い）、示唆を与えてくださる専門家とのかかわりの場を設定すれば、課題を自分事として再度とらえ、自分の考えをもつことができる。

○知識、体験を言葉でまとめることで、自分の身の回りにある問題を、まとめたことと絡めて考え、学びを深めることができる。

▲市などの行政や地域の方に、自分たちの考えを発信することができなかったので、子供たちの思考を深めることができなかった。

▲子供たちと地域の方との相互の意見交換が、次の段階へと進めることができると考えるが、そういう場の設定を行えなかった。